畧
歴

明治二十六年 二月六日(届出五月一日) 兵庫縣明石郡明石町之内大明石村字東片端に出生。父久右衛門五十四歳、母つゆ四十歳、義姉しげ異母九歳、祖母しか七十二歳、の五人家族にて、父が明石町某生魚問屋に帳場を勤め、漸く一家をささきゆ。月給七八圓なりと聞く。

明治二十八年(三歳) 二月、弟從藏生る。(但し三歳の時、親戚阪本龜藏方に養子となり、現在姫路市にあり)。この秋、頭部に悪性の腫物密生し死に瀕す。現在後頭左部に凹みし大禿あるは其時の遺物なり。(前年、大明石村大手町に移轉)

明治三十三年(八歳) 明石第一尋常小學校入學。爾後四年卒業までの間、續いて副級長をつとむ。

明治三十七年(十二歳) 四月、明石高等小學校へ入學。六月、肋膜炎及び眼病に罹り休校、そのまゝ遂に退學す。この時、義姉しげと義兄竹治郎(異父也)との間に婚約成り、一家を構えて今立家(親戚にて後嗣絶え居たりしもの)を起す。即ち今、姫路市福山町に住し母つゆ共におり。下駄職にて至つて貧也。(註、父母は晩婚にて、共に先夫先婦間に子供多くあり、されど行衛不明の者、或は他家を嗣げる者のみにて、この父母の老後を見る可きもの、僕及び今立家夫婦の他になし)

同じ頃、家と同町之内東本町濱通りに移し、母は煙草及び小量の下駄などを商ひ始む。僕は退學後しばらく兄の許に下駄職を見習ひしが、十一月、父の遠縁に當る大阪東區北濱一丁目木田元三郎(有價證券賣買業)方に丁稚見習として預けられ子守などささる。

明治三十八年(十三歳) 一月、木田の紹介にて同町株式仲買人阪崎藤兵衛(後に高橋安治郎商店と改稱)方に丁稚となる。夜は愛日實業補習學校に通ひ、爾後、凡そ三ヶ年間學ぶ。店員某を師とし、俳句を學び初めて錦江と號す。

明治四十年(十五歳) 木田元三郎より相談あり、同年冬、高橋方を強ひて暇取り、木田の店員となる。木田は家庭大いに紊亂し、且つ主人は刑餘の身なりしかば、店も一向に信用なし。殆んど詐欺に類する行爲にて店を支ゆ。事情かくの如くなれば、僕、早くも惡事、遊蕩を覺え翌年十六歳の秋、猛烈なる淋疾及び梅毒に悩みたり。其後今日に至るまで、この病ひ或る時は猛り或る時は衰へつ、竟に癒ゆることなし。

俳句の熱いよ／＼上り、知名の人々にも接し運座にも通る。號を醉蜂と改め、専ら碧梧桐に心醉す。

明治四十二年(十七歳) 六月、木田より轉じて同町内の株式仲買店尼崎愛藏商店に勤む。元服して久七と名乗る。此處に四十四年の秋まで働きしが、その間、政治、思想等に關する興味大いに起り、演説會講演會などに熱し始めたり。且つ、店員に永尾眞一郎といふ人あり、この人尾崎行雄の周囲の人々と交厚く、又、往年北海道に在つて社會主義者西川光二郎一行と共に演説せし事などを話す。當時、この人との接觸によりて、政治、思想、方面の感化を多少受けたり。但し、この時はまだ社會主義の内容に就いては少しも知らず。

明治四十四年(十九歳) この年の秋、事情ありて、支配人大谷力他四五名と共に尼崎商店を退く。而して大谷氏の再擧を待ちつつ同家に食客す。

大谷氏雜書を藏す。僕、暇にまかせて殆んど讀盡す。大谷氏、維新の政變に活躍せし人々の事を好んで論じ、殊に勝海舟を敬す。僕はむしろ自由黨の運動に興味を感じ、中江兆民を敬愛す。僕一日、兆民の遺筆『一年有半』及び『續一年有半』を求め讀む。編者を見れば怪しむべし逆徒幸徳秋水なり。僕、これにはいたく愕きたり。讀いて購ひし『兆民先生』の一書、之また秋水の筆にして、然も彼れが、吾が敬愛する兆民門下の高足なる事をも知るに至れり。それ以後社會主義なるものの内容を知りたき念、甚だ強まりしと覺ゆ。

明治四十五年(二十歳) 一月、神戸に某現場師(謂ゆる合百師)を手傳ひ、三月初め歸阪(大谷氏方)せしが、その間、同地にて憲政擁護運動の群衆中に巻き込まれ、代議士小寺謙吉郎のぶつ壞しを見て、大いに血を跳らす。

五月、同人相語らひ俳句雜誌『紙衣』を發刊して俳壇に氣を吐く。然して之れ、僕の俳句に熱せし最後なりき。

大谷氏再擧の望みなければ、夏頃より株式の外交員となり、仲買店奥田淺治郎、馬場能藏等に注文を取次ぎ、北區上福島三丁目に下宿す。然るに、七月に入つて馬場仲買店破産し、奥田仲買店又續いて支拂停止を告ぐ。爲めに客全部を失へり。加ふるに、友人某より借受けし公債若干、及び父を欺き生魚會社の權利株を賣らせて作りし金若干とを相場にて損失し、煙となし終る。慚愧やる方なし。殊に當時、積年の病毒の結果、強度の梅毒性神經衰弱に罹りて懦弱と自暴に陥り、竟に自殺を決して八月下旬船にて土佐に渡る。

高知の港にて上陸し、翌日南端字佐に泊す。死所と定めし同所青龍觀音の絶崖に立ちて死に得ず、夜、宿屋にて毛生液ナイスを仰ぎて遂げざりき。止むなく宿料の代に羽織等を脱ぎ、そ

れより心に行き倒れを期しつつ北に向つて山路に分け入る。山畑をかすめ、水を抱みなどして三日目に伊豫の別子銅山に出づ。此處にてフト心變り、銅山難夫を志願せしが容れられず、再び、漂泊を續く。その後、或は木樵小屋に、或は漏路宿に、或は農家に救はれし、時には人の軒端の積糞の上に乞食と共に寐などして、三島、觀音寺を経て讃岐丸龜に出ず。その夜、丸龜の町々をさまよひて人に怪しまれ、警察に一宿を乞ふて街路に投げ出され、感極りに港に走り出で入水せんとせしが、此所にも漁人に妨げられて死に得ず、夜明けたり。フト俳友青城氏此地にあるを思ひ出し、風袋町に訪ぬ。此所にて大阪の知人俳友等に手紙を出して貰ひ、旅費など送られて、九月上旬無事大阪に歸る。

歸阪後、直ちに下宿を引拂ひ、暫く某印刷製本所の注文取りになりしが、十一月、神戸市栗町三丁目株式仲買店柏原重彌方に店員として住込む。されど一向に商賈には身入らず、古本などを漁りて雜書を耽讀す。

大正二年(二十一歳) 商賈不熱心により、二月柏原商店を解雇さる。餘暇ある勞働を望み同市相生橋際時事新報支局に配達夫となる。三月末、前記大谷氏突然配達所へ尋ね來り、「奥田商店の整理成り今後自分が經營する事になりたれば來り投ぜよ」と言はる。即ち上阪して奥田商店に入り、追證簿を受持つ。四月、兵役検査あり、丙種不合格。

五月頃より、又々神經衰弱の兆候著しくなり、妄想、自棄の變な状態に陥り、五月末、漂然と京都に至り、何處ともなく歩き廻る。懷中持たねば、夜疲れて五條橋停留所にて寐居るところを五條警察署に引き行かれ浮浪罪に問はれしが、三日目に大阪へ送り返へされ釋放さる。奥田に歸へりしが其場より放逐され、西區境川に北尾新聞支局の配達夫となる。此處にて、自分の生くべき道は眞面目なる勞働生活にて、決して浮薄なる株式界の生活にあらざる事を確く悟れり。

二月頃ほど経て、再び大谷氏より手紙あり、許すから歸れとなり。時に僕の心中既に一轉機を遂げ、株式界に戻るの心少しもなかりしが、その程より古本の露店を志して資金に困じ居たれば、それ等の準備金を蓄ふる爲めに、再びしばらく株式界に戻らんと決心なし、謝して奥田商店に戻る。かくて其の年一杯ここに勤め、その間に一切の準備を整へたれば、終に心底を大谷氏に打ち明け、新春より新境地に入る事を得たり。この秋、新聞の廣告にて社會主義者堺利彦の編輯する『へちまの花』といふ雜誌の發刊を知り、直ちに申込みて讀み始む。即ち、此處に於いて、始めて僕と社會主義との接觸開かるるに至りし也。

大正三年(二十二歳) 一月、同市福島の某家二階を借り、古本の夜店を出し始む。

此頃より愛讀誌『へちまの花』は堺氏の『小さき旗上』てふ一文を掲げて『新社會』と改題し、

大いに社會主義の説を主張し始む。その論鋒、現代社會の罪惡を鳴らして痛癢、社會組織の誤謬を指して適切なりしかば、一句々々讀む毎に眼輝き血熱すの思ひありたり。堺氏の『實文集』『社會主義倫理學』などを讀み始めしも此頃なりと覺ゆ。かくて僕の精神一度社會主義の眞理に照らさるるや、機向更に進進して眼界曠々たり。僕遂に、この運動の一生活を捧げんと思ひ立ちたれど、又省みれば國には老ひたる兩親の僕の成功を待つあり、且つ恐ろしき苦悶の途のよかりの如き弱き人間に堪え得べしやなどと思ひ惑ひて、商ひを餘所に悶々の日のみ續くに至りたり。やがてはそれが例の神經衰弱の兆候を呼び起し、前途濛々となり自棄に變じ、三月末一切を賣り拂つて遊蕩に費ひ果し、又々漂然として放浪の旅に出で、夕方有馬郡三田に着く。此所にて鐵道線路に飛込んだりして果さず、同夜、三田警察署に自ら爲さざる罪を名乗つて出で狂人として拘留さる。四五日経て國元より老父來り連れ歸る。歸宅するまで、父は僕を發狂せしものとのみ信じ居たりし様子なりし。

歸郷後、社會主義の事など一切忘れはたし、ただ、平々凡々に生活して親の下に侍して生活さんと決心なし、一心に所々働き口を求めしが、更になし。夏過ぎ、秋になつて未だなし。しかも母親は、親戚なり世間なりに對する見榮、意地強くして生活は赤貧なるに僕をして俵夫人の如き勞働を許さず、外出には羽織を着ざれば怒るといふ風也。この母の氣持を酌んで悲しく、且つ赤貧の見るに堪え難ければ、終に又決心を斷して、十月上阪し、舊知なる境川の北尾新聞店に至り配達夫となる。

かくて又も勞働生活に入るや、社會主義運動に身を投ぜんとの熱望、再び猛然として湧き來る。配達之餘暇『新社會』の他に種々社會主義に關する書籍、哲學書などを漁り、人々との議論に熱し、社會組織を呪ふ。舊知皆な僕の激變に驚愕の眼を睜はるに至れり。次いで『新社會』への投書より堺氏との文通生じ、大阪の同志(全部で僅に四名)に紹介され、會合に出席す。一方大杉、荒畑等の發行せる『近代思想』、横濱の『解放』などを購讀し、又、大杉の名著『勞働運動の哲學』『社會的個人主義』を購ひ、同志より『青年に訴ふ』『ゼネラルストライキと經濟組織の未來』『勞働階級の戦術』等の秘密出版を借讀するに及んで、サンヂカリズムの運動に全く心を奪はれるに至れり。

大正四年(二十三歳) 堺氏との文通、及び附近諸工場への宣傳紙撒布を知られ、正月來度々刑事に見舞はる。然して此の刑事の訪問によりて、主義運動に身を投ずるの決心いよく確固となれり。間もなく主任と衝突し、去つて附近の二階を借りて俵夫となる。

されど、社會主義の學說を徹底的に研究し、運動方法を知るには是非一度上京して諸先輩に接する必要があるを痛切に感じ、三月末上京に決す。然れ共、旅費出來ねば先づ京都に至る。此處にて新聞配達をなし、幾何の金を得て更に名古屋に至りしは五月末なりしと覺ゆ。愛知新聞

主筆横田宗治郎君は我等の先輩なれば、此の人をたよる。此處にて配達主任となつて働くこと三ヶ月、その間、横田君所蔵の多くのサンヂカリズム及び無政府主義に關する書籍に讀み耽りたり。

八月、横田君から東京諸先輩に對する紹介状を貰ひ、勇んで上京す。上京後は直ちに浅草藏前内外新聞配達所に投じ、程經て、麹町區永田町に賣文社を訪ふ。九月、日本橋區濱町河岸玄米ミルク社の配達夫に轉ず。月末本郷東片町南天堂二階に同志渡邊政太郎君を訪ひ諸同志に會見す。座に村木源次郎君あり「濱町は餘りに遠し、僕今、此の附近の牛乳舎に在るが近く止すつもりなれば、君來りて働かずや」と言ふ。即ち、十月、小石川表町石渡牛乳店に轉じ、絶えず渡邊君を訪ふ諸同志と交り、議論し、多くの書籍を借讀す。十月末、玄米ミルク社に給金の残りを貰ひに行きしが、主人言を左右にして渡さず、僕大いに激怒して亂暴を働く。依つて久松署に引致され三日後釋放されしが、それより刑事二人に尾行され石渡牛乳店に歸る。石渡主人尾行に驚いて直ちに解雇を申渡す。その夜は富坂署の道場に獲せられ、翌日渡邊君を訪ひ、食客す。

十一月月上旬、同志間に何事かの調策ありしが、新米の身の悲しさ、その仲間から除外されしを大いに憤慨し、されば、僕には僕の運動方法ありと心に決し、間もなく入夫募集人に連れられて密かに足尾銅山に入込む。足尾の入夫部屋は聞きしにまさる虐待にて、持物から衣類まではぎ取られ、哀れ人間一疋、四圓五十錢に賣渡されて、破小屋の中に監禁さるる身とはなりたり。坑内の虚便に堪え兼ねて逃走する者、病死する者、壓死する者、手足を折る者など續々あり。只々膽を冷すのみ也。元氣ある者は、酒と博打とダルマ(淫賣婦)の他何ものもなし。宣傳の理想はじめに打くだかれて、今は己れの命危くなりたり。如斯なれば、十二月十五日大雪の夜、友一人と語らひ、便所より脱け出し逃走す。渡良瀬に沿つて、雪を踏み、岩によち、翌朝漸く神戸といふ僻村に着きしが、此處にて再び捕へられ、半死半生に打たれて入夫部屋に連れ戻さる。

大正五年(二十四歳) 一月五日、病院に通ふ(落磐にて負傷)時、隙を狙つて逃げ出し、線路へ駆け入つて發車しつゝある汽車に飛び乗り、種々出来事あつて後、翌日、ともかくも歸京するを得たり。

直ちに渡邊君を訪ひ、喜び迎えられる。同じ南天堂二階の一室に居りし久板卯之助と同居し、彼れが單獨發行しつゝありし雑誌『勞働青年』を手傳ひ、専ら體の養生をなす。後、小石川春日町の安場の部屋に入り、市役所の道路課雇人夫となる。轉じて、神田三崎町の中村の部屋に入り、砲兵工廠兵器所の入夫となる。荒畑寒村編輯の『勞働組合』を密かに工廠内に撒布しつゝありしを發見され、即時職首さる。それより、深川富川町、淺草洞橋等の木賃宿を漂泊しつ

つ、品川驛線路工夫(雇)、芝浦製作所、東京市電氣局等の入夫をなしつゝありしが、更に轉じて本郷追分町に國民新聞の配達夫となり、傍ら、渡邊政太郎君と共に平民病院の廣告を配りなす。

當時、代議士總選舉あり、堺利彦氏試みに立候補す。僕、雇はれてその運動員となり、主としてビラ撒きと演説會準備係とを受け持ち、些か奮闘す。これより堺利彦、高島素之兩氏に認められ、賣文社員となる。

大正六年(二十五歳) 賣文社、京橋南鍋町より麹町有樂町に轉ず。僕、玄關番を経て賣文の手傳ひなど爲しつゝ、主として堺氏に文筆のことを教へらる。後に雑誌『新社會』の編輯を手傳ひしが、堺、山川、高島、荒畑の諸君により、その間多く啓蒙さるる所ありしは勿論也。

一方、古くより渡邊君の家に開きつゝありし集會の、渡邊君の慈父の如き温情と悲壯なる奮闘とにより、漸く堅實なる芽を發し來る。僕、これを見て、ただ賣文社にて文學の事にのみ耽る恥しきを感じ、久板君と計つて、共に日暮里の貧民町に一軒を借りて大いに活躍なさんとす。爲めに賣文社を退きしは、その年の十二月なりき。

大正七年(二十六歳) 一月一日、大杉夫妻、府下龜戸の勞働者街に移つてサンヂカリズム運動を起す爲に、先づ平易なる勞働者のみの新聞を發行せんとす。然して、僕等の同じき企てを知つたる大杉は、共に來つて力を合はせずや、と言ひ來る。久板と共に大杉を訪ひ、語り合つて意氣相投したれば、翌日、早速、日暮里の家をたんで龜戸に同居す。

四月、『勞働新聞』第一號を出す。二號、三號、禁止さる。資金の道絶ゆ。七月、居を田端に移し、大杉夫妻を九州に送つて、滿腔の想ひを吐露したる第四號を最終號として發刊す。忽ち新聞紙法違反によつて起訴され、久板は五ヶ月、僕は十ヶ月の禁錮を言渡されて、東京監獄に十月入監す。

大正八年(二十七歳) 八月五日出獄。大杉夫妻、近藤憲二、中村還一、延島英一、久板卯之助等と共に本郷駒込曙町に勞働運動社を起し、十月『勞働運動』第一號を發刊す。僕、大阪に下りて大阪南區空堀町に勞働運動社支局を設く。十二月、大杉入獄。

大正九年(二十八歳) 毎月、雑誌編輯の爲め東京大阪間を往復す。二月大杉出獄。四月より『勞働運動』に關西版を設く。六月廢刊。

僕、猶大阪に止まつて運動なし、衣食の爲めに再び傭夫となる。八月末日、突如として義兄今立竹治郎姫路より支局を訪ふ。曰く「長年汝の行衛知れねば兩親の心痛一方ならず、今老衰

して姫路の阪本の離家にあり。父の餘命なく、且つ親族一同にて汝に談合もあれば、今より共に姫路に來れ」と。即ち、伴はれて姫路に至る。

父母との對面は六年振り也。僕、ただ頭を下げて一言もなし。父を見るに老ひ呆けて小兒の如し。涙下る。翌日親戚の誰れ彼れ相集り、僕を圍んで言ふ。「我々は決して汝を責めず、幼なかりし汝一人に此の二人を背負はせし我々(母の子供等にて僕の義兄に當る)にも罪あり。勿論今後とも我等にて此の二人は養はんれど、汝も此の地に歸り、兄弟親族、共に仲よく楽しく暮さずや、汝の生活は如何様にも相談せん」と。僕答へて云ふ。「僕の不孝の大罪は詫ぶるに言葉なく、諸子の親切温情は厚く溢るゝばかり也。然し、社會主義は僕の生命也。之を捨てて何んの生甲斐あらんや。諸子の厚意を退くるは心痛き限りなれども、此の上は兩親を伴ふて上京せんのみ」と。其の夜、近くに住む今立に行きて寝ねしが、義姉しげ泣いて云ふやうに「父が氣の毒なれば是非歸つてくれ、母一人なれば親戚は皆な母を養ふべき義務ある者のみ故、汝居ずともよし。されど、父の身寄は全く此處にはなく、阪本にて彼の如く養はるるは如何ばかりか悲しかりなん。且つ、あれにては阪本に養子となり居る弟從藏が可哀相也」と。僕、やや暫く黙して、涙を垂れて居しが、「許せよ、皆な僕のなせる罪也。誠に父は氣の毒なり。僕、親戚達の親切温情の言には少しも心動かされず。彼等が情け心に含まるる世間的な飾り氣の分子の多くを透視するに難からざれば也。しかし、父の老ひほうけたる有様、あの、ただ小兒の如くニコ／＼と嬉しげなる様や、阪本の夫婦に對して君主に對するが如き慇懃さを見せられし時に血涙溢れて眼もくるる思ひをなしたり。あれを毎日眼前に見つある貴女や從藏は、さぞかし心づかるべし……あゝ、僕、社會主義運動を捨てて、一時姫路に歸り働かん。父母に侍さん。姉よ、僕心を決したり。されど、父を見送りし後は直ちに去つて元へ還るべし」と。

かくて僕は、翌日その旨を親戚の人々に語り、一旦大阪に歸りて凡てを取り片付け、且つ大杉の許には長文の手紙を出して一時運動より身を退く事を述べ、四日後に姫路に歸りたり。先づ、今立の兄に相談して、老親を阪本から其の貧家に引取り來る。翌日、老父は心癒しければと孫に連れられて神詣でせしが、歸り來る時、長屋の路次に足をとられ打伏す。然るに、それより足腰立たずなりて病體となり、七日目には早や眠るが如く息絶えたり。葬式など萬端終りて後、母を今立に依頼して相州鎌倉なる大杉の家に向つて急行す。時、九月下旬。十月中旬、大杉支那より歸る。(旅行約一ヶ月半)十二月初旬、社會主義同盟の第一大會あり。

大正十年(二十九歳) 一月、神田北甲賀町駿臺俱樂部内に労働運動社を設け、週刊『労働運動』を發行す。同人は、舊同人の他に、近藤榮藏、高津正道、竹内一郎、寺田鼎など加はる。五月中頃、大杉の命を受けて近藤榮藏上海に使せしが、六月、下關にて捕はる。それに關係せ

るボルセキキ等の僕等に對する奸策陰謀曝露し、週刊『労働運動』は六月を以て廢刊す。七月下旬、單獨にて西部宣傳旅行の途に上る。直通、琉球に至り三週間ほど滞在、それより九州一圓、四國、中國を経て、九月中旬歸京。近藤憲二と共に麹町元園町元社會主義同盟本部の二階に住し、労働運動社の再舉を準備す。

大正十一年(三十歳) 本郷駒込片町五に労働運動社を設け、一月より月刊『労働運動』を發行す。同人は、大杉夫妻、近藤憲二、村木源次郎、及び僕との五人也。大杉夫妻は逗子より通ふ。五月、心中些か面白からざる事あり、且つ例の神經衰弱的の製作も伴ひて、暫時郷里に逃避を決し、同志には無断にて突如姫路に歸る。歸郷後、今立に寄寓して某米穀取引所仲買人の帳場に勤む。六月、村木源次郎、大杉の使として來り、頻りに歸京を迫る。六月末日歸京し再び労働運動社に投ず。大杉夫妻、亦逗子を引揚げ來りて共に生活す。

十月、大阪に開かれし、全國労働組合總聯合協議會に出席す。そのまゝ大阪に止り、南區天王寺公園前に労働運動社支局を設く。十二月、大杉、世界アナキスト大會出席のためフランスに渡る。

大正十二年(三十一歳) 一月、労働運動編輯上の事に就き意見(殊に伊藤野枝君と)合はず、且つ病身にもありたれば、二月夜、辨蓑温泉に至り江口漢君にたよる。五月歸京。温泉にて生れて初めての戀女を得、歸京後、彼女の近く(淺草千束町)に二階を借りて住み、労働運動社と離れて雑文など書きて生活す。

七月、大杉歸國、村木源次郎、僕を淺草に呼びに來る。大杉と僕と談數せし後、僕「猶しばらく運動を止めて居たし」と言ふ。大杉、「さうだ。しばらく遊ぶがい」とて、遊んでゐる間の生活費を支給せんといふ。僕、笑つてこれを受く。

八月中旬、僕、膀胱カタルを病み、横臥す。村木來つて「社には君の嫌ひな野枝君は居ぬ。來つて寝よ、看護せん」と言ふ。八月二十四日、村木に伴はれて労働運動社に行き病臥す。

九月一日地震、鮮人、社會主義者、並びに大杉夫妻宗一君など虐殺さる。僕の色女は此時より行衛不明となる。後、郷里に歸省し居りしこと判明。翌十三年五月頃、梅毒にて病死せしと聞く。

大正十三年(三十二歳) 九月一日、福田雅太郎を狙撃して果さず。捕はる。

大正十三年十一月三日日記

於東京刑務所 和田久太郎

大正十四年(三十三歳) 五月二十一日より東京地方裁判所に於て、福田雅太郎暗殺未遂事件の公判開始さる。裁判長は宇野要三郎、検事は黒川涉にして、辯護士は山崎今朝綱、布施辰治等の諸氏なりき。検事の求刑は死刑なりしが、九月十日、無期懲役の判決言渡しあり、控訴せず服役す。九月十九日、市ヶ谷の未決監より秋田刑務所に移さる。

昭和二年(三十五歳) 市ヶ谷刑務所で書いた隨筆、書簡、短歌、俳句等を蒐め、『獄窓から』と題し、労働運動社より出版さる。

昭和三年(三十六歳) 二月二十日、「もろもろの懐みも消ゆる雪の風」の辭世を遺して秋田刑務所の監房で經死す。二十二日、望月桂、近藤憲三、秋田に赴き、遺骸を茶毘に附して携へ歸る。三月二十一日、神田松本亭に労働運動社主催の告別追悼會を開催せしが、反動團體と官憲のために蹂躪さる。

(以上編者追記)

編輯後記

本書の前篇『獄窓から』は、嘗つて和田君が福田雅太郎暗殺未遂事件の被告として市ヶ谷刑務所に收監されてゐた時に書いたもので、昭和二年三月、勞働運動社から出版したものの共儘である。そして、後篇の『孤囚漫筆』は、説明するまでもなく、無期懲役囚として秋田へ行つてからのもので、それに『略歴』を加へて一冊に纏めたのである。

従つて『前篇』は、大たい和田君の希望に基いて編輯したのであつたが、『後篇』は全く編者の獨斷で取捨した。

しかし僕は、本書に於て、久太といふ多角的な人間の各方面を、可なり充分に現はし得たと信じてゐる。殊に僕は、本書に收めた書簡が、最も露骨に久太そのものを投げ出してゐると思ふ。望月福子さんに宛てたしんみりとしたもの、同志に宛てた運動上の見解と氣憤、それから彌次、皮肉、與太、フ、フンと鼻先きで笑つたところ、何れも久太の一面である。そしてその綜合が、久太そのものである。

ただ、秋田へ行つてからは、書簡に見られるやうに、厳しい制限があつたので、社會問題に關するものは殆んど全く書かれてゐない。その代り、盡くことのない思ひ出に耽つたり、一本の雜草にも言ひ知れぬ悦びを感じたり、自分の心をちつと見詰めたりする靜かな方面は、市ヶ谷時代に比して、より強く描かれてゐるではないか。

僕は今、本書の校正を急ぎつゝ、幾度びか筆を止めて、亡き同志のありし日を思ひ浮べたことであつた。或る時は微笑みを以て、或る時は全身の血の逆流するのを感じながら。

和田君の死後既に一ヶ年半を経過した今日、やうやく本書を出版することが出来て、兎も角も一種の安堵を覚えるのである。しかしながら、この久しきに亘つて本書を完成し得なかつた僕の怠慢を、同志諸君、及び和田君に親しみを持つてゐて下さる多くの人達に對し、幾重にもお詫びして置かなければならない。

一九三〇年八月

近 藤 憲 二